

# 言葉の壁を乗り越えて見えたもの

## 中三

「人と話すことが大好き。」

今、私は心からそう思うことができる。でも、昔の私はそうではなかった。

私は保育園の年長の頃、ブラジルから日本に引っ越してきた。まだ小さく、日本語もほとんど話せなかつた私にとつて、日本での生活は毎日が不安と緊張の連続だつた。何を言わわれているのか分からず、思つていることを伝えることもできず、自分だけが取り残されているような気がしてゐた。そんな中で、ある出来事が私の心に深く残つてゐる。それは、保育園でのことだつた。同い年の男の子に何かを言われたり、蹴られたりした。日本語が分からなかつた私は、その言葉の意味までは理解できなかつたけれど、それが悪口のようなものであることは、表情や口調からなんとなく伝わってきた。どうすればいいのかわからなかつた私は、混乱と不安の中で、小さな手でハサミを握りしめてしまつた。「やめてほしい。」という気持

ちを、どうにかして伝えたかつた。もちろん、相手に怪我をさせたり触れたりしたわけではなかつた。それでも、その子は保育園の先生に「怪我をさせられた」と嘘をついた。言葉で説明することができなかつた私は、何も言い返せず、ただ黙つていることしかできなかつた。すると先生は私の話を聞こうとせず、怒つて私の首をつかんできた。

そのとき、私は「自分は悪い子なんだ。」と思いつ込んでしまつた。誰にも理解してもらえない、自分の存在が否定されたような、そんな悲しい気持ちになつた。家に帰つてからも、親に話すのが怖くて、心の中にしまい込んでしまつた。言葉が分からぬことで、自分の気持ちを説明することができず、助けを求めることがすら難しかつた。

今思えば、きっとその場にいた人たちの中には、「外国人だから」「日本語が通じないから仕方ない」といつた先入観があつたのかもしれない。もちろん、私がハサミを持つてしまつたことはよくなかつた。しかし、そのときの私は、自分を守るために必死だつた。そして何よりも、自分の思いを伝えるための「言葉」という道具を、まだもつていなかつたのだ。その後、私は小学校に入学す

るタイミングで、今住んでいるA町に引っ越ししてきた。新しい学校での生活は、それまでのものとはまるで違っていた。先生たちも優しく、友達も気軽に話しかけてくれた。毎日が少しずつ明るく、楽しく感じられるようになつた。A町は、外国にルーツをもつ人が多く暮らしている地域だ。学校にはブラジルだけでなく、中国、フィリピン、ベトナム、韓国など、さまざまな国籍の子供たちが通っている。でも、私の周りの友達は、誰に対しても「外国人」だとは思わず、一人の人間として自然に受け入れてくれる。見た目や出身地で決めつけず、違いを当たり前のものとして受け入れてくれる。私自身も、自分の国籍を意識することがほとんどなくなつたけれど、ブラジル人であることは誇りをもつてている。だからこそ、私は自分らしくいられるのだと感じる。

そんな環境の中で、私は日本語の勉強にも一生懸命取り組むようになつた。そして、学校生活の中でも、これまで挑戦できなかつたことにチャレンジしたいという気持ちが芽生えてきた。中学三年生になつた私は、思い切つて初めて学級委員に立候補した。最初は不安もあつたけれど、先生や

友達が背中を押してくれたことで、自信をもつて一步を踏み出すことができた。学級委員としての活動の中で、私は今まであまり話したことのなかつたクラスメイトとたくさん会話をすることになった。すると、相手の意外な一面を知ることができたり、「もつと話したい。」「もつと関わりたい」と思えるようになつたりした。保育園の頃には苦手だった「人と話すこと」が、今では私にとつて大切で楽しい時間になつていて。

言葉が通じないことで傷ついた経験。そして、家族や周りの人の温かさに支えられて前に進むことができた経験。私は、そのどちらも経験したからこそ、今の自分があるのだと思う。そしてこの経験を通して、私は強く感じている。言葉が通じない、思いを伝えられないというだけで、どれほど心細く、どれほど苦しいか。誰かに助けてほしいのに、声を出すことができない……。そんな人の存在に、私は気付ける人でありたい。言葉や文化が違つても、「大丈夫?」と声を掛けることはできる。それが、相手を理解する第一歩になり、相手の人権を守るきっかけにもなると、私は信じている。だから私はこれからも、人とのつながり

を大切にし、困っている人にそつと寄り添えるような存在でありたいと思つてゐる。